

生態学と経済学

文：小寺 祐二（「野生生物と社会」学会理事・宇都宮大学農学部附属里山科学センター）



預貯金が増えると喜び、減ると不安を抱きます。これは当たり前感覚だと皆が思っているかもしれません。しかし、それは経済学的価値概念に染まっている証拠です。歴史を顧みると、無限の経済成長は汎用資源だった木材を枯渇させ、新資源開発を推進し、さらには新資源の化石燃料までも枯渇させようとしています。こうした浪費が、野生生物の絶滅の原因になっています。

また、化石燃料へ汎用資源が転換したことで日本では薪炭林の植生が回復し、イノシシなどの分布域も急速に回復しています。その結果、農作物被害も拡大し、社会的課題になっています。

本学会で扱う諸問題は、経済学的価値概念と切り離すことができない課題です。オダムは『基礎生態学』の冒頭で「生態学と経済学は仲間の領域である」と記していますが、同書の最後に「生態学と経済学の融合、そして人間の価値と同様に環境を含める様な倫理の拡張によって、人類の未来が楽観視できる」とも指摘しています。この指摘は、本学会が目指す所と一致するのではないのでしょうか。

機械論的世界観から脱却し、楽観的な人類の未来をつかみ取るためにも、「野生生物と社会」学会が活動を広く展開できることを期待します。



島根県浜田市の集落の風景。この集落は、鎌倉時代には存在しており、明治4年当時は戸数115戸、人口549人だった。数軒が現在も残存するが、かつての薪炭林や農地のほぼ全域が管理放棄されている。写真中央はイノシシによる土耕痕。